

監修

佐佐木信綱
新村出
津田左右吉
山田孝雄
和辻哲郎
辻善之助

海東道
關紀
十六夜日記
行記

石田吉貞校註
玉井幸助校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

監修

佐佐木信綱 新村 出 津田左右吉
辻 善之助 山田孝雄 和辻哲郎

海東道
關紀
十六夜日記
行記

石田吉貞校註
玉井幸助校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

日本古典全書

「海道記・東關紀行」 玉井幸助校註

「十六夜日記」 石田吉貞校註

昭和二十六年四月十月初版發行

昭和三十一年一月三十日改裝

組版所 株式會社井村印刷所

印刷所 明善印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田

區有樂町・大阪市北區中之島・

小倉市砂津・名古屋市廣小路）

定價 二八〇圓

目次

古人の踏んだ東海道

一	鎌倉時代までの記録	一
二	順路と日程	四
三	古人の旅情	七
四	海道筋の文化	二一
五	名所舊跡	二〇

海道記

解説

一	内容と文章	四
二	海道記の作者	三
三	海道記の諸本	四
四	承久の犠牲者に對する記事	五
凡例		六

本文

一 序	五	一二 手越より蒲原	九四
二 京より大岳	六	一三 蒲原より木瀬川	一〇一
三 大岳より鈴鹿	六	一四 木瀬川より竹の下	一〇
四 鈴鹿より市腋	七	一五 竹の下より逆川	一四
五 市腋より萱津	七	一六 逆川より鎌倉	一六
六 萱津より矢矧	七	一七 鎌倉遊覽	二三
七 矢矧より豊河	七	一八 西 歸	二七
八 豊河より橋本	八	一九 花京の老母	二九
九 橋本より池田	八	二〇 東國は佛法の初道	二三
一〇 池田より菊川	六	二一 東國にさまよひ行く子	一三
一一 菊川より手越	九	二二 極樂西方に非ず	二六

東關紀行

解説

一 内容と文章	一三	三 東關紀行の諸本	一五
二 東關紀行の作者	一五		

凡 本 文

例	一五
---	----

十六夜日記

解説

一 序	一五	九 今の浦より前島	一八〇
二 京より武佐	一六	一〇 前島より興津	一八三
三 武佐より柏原	一七	一一 興津より車返	一八六
四 柏原より株瀬川	一八	一二 車返より湯本	一九〇
五 株瀬川より熱田	一九	一三 湯本より鎌倉	一九三
六 熱田より赤坂	二〇	一四 鎌倉遊覧	一九六
七 赤坂より橋本	二一	一五 歸京	一九九
八 橋本より今の浦	二二		

一 著者

父母・兄弟	二〇五	細川莊に關する誤説	三六
生歿年代	二〇六	細川莊の出自	三七
生涯	二〇七	細川莊に關する訴訟	三〇
性格	二〇七	十六夜日記の解題	三三
稱呼	二〇九	書名・諸本・研究書	三六
子供	二一〇	構成	三九
作品	二一四	文章と歌	四一
二 細川莊について		附	四三

目次

四

凡本

例

文

一 旅の記

三六

三 長歌

三〇

二 鎌倉帯在の記

二八

二五

古人の踏んだ東海道

玉井幸助

一 鎌倉時代までの記録

東海道といふ名は、古く日本書紀に見え、今日に至るまで一千數百年の長い間つかはれてゐる。もと皇都から東方の諸國へ通ずる道が二筋あり、山によつたものを東山道、海に沿つたものを東海道と呼んだのである。道の名であるが、またその道筋にあたる國々のことをもいふので、東海道といへば伊勢から常陸までの十五國をいふのである。上代には専らエゾの住んだ地方であつたから、後世までもその地方に住む者と呼んで東夷といひ、あづまえびすといつて、その文化の低いことを賤しみもし、その風俗の剛強なのを恐れもした。

日本武尊が巡視せられたころは主としてエゾ種族の住所であつたのだが、その後、中央貴族が下つて諸地方に定住し、朝鮮からの移民も諸所に住居するやうになつて、東國特有の文化が形造られるやうになつた。かくて平安時代に入ると、資源開發のために中央と東國との關係がますます密接になり、鎌倉幕府創立以後はいよいよ京・鎌倉の往來が頻繁になつた。

東海道五十三次、江戸日本橋を振出しに京都の三條大橋まで五十三の宿次を置き、驛馬・傳馬を次ぎかへて旅したのは江戸時代のこと、まだ醒めやらぬ昨日の夢である。寢臺車の一睡、飛行機の一閃に比べたら、蟻が這ふやうな、もどかしい旅であるが、それでも幕末時代に將軍宣下の勅使として江戸へ下つた某公卿が、「君が代はうまやうまやに旅寢して草の枕も知らで來にけり」と詠んだといふ。なるほど上代の旅に比べたら、汽車はなくとも飛行機はなくとも、君が世のありがたい旅であつたに違ひない。

東海道の旅で最も古く知られてゐるのは、古事記・日本書紀に記された日本武尊の東方巡視である。尊の東征は第十二代景行天皇の四十年（西紀一〇）、今より一千八百年も前のことである。尊は和の都を出發して伊勢大神宮に參拜し、そこに奉仕してゐられた御をば倭姫から劔と火打袋とを餞別にいただいて行かれた。この二つの品は、當時の旅では缺くことのできない必要品であつた。尊は伊勢から尾張・駿河を経て、相模から舟で上總に渡り、さらに海路、安房・下總の海岸に沿うて常陸に上陸し、北上川流域地方、そのころの日高見の國まで進んで歸途につかれた。歸路は常陸から甲斐に出で、武藏・上野を経て信濃に入り、美濃に出で尾張に到り、近江の伊吹山の賊を攻めて病にかかり、伊勢の能褒野でなくなられたのである。

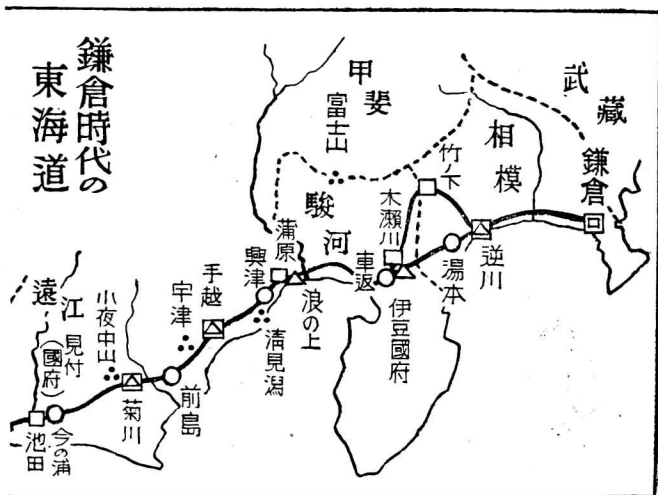
尊は往復とも、尾張では宮簀姫の家に泊られたといふから、中央に關係のあつた地方豪族の家に宿泊せられるといふやうなこともあつたらしいが、多くは露に臥す草の枕の明け暮れであつた。甲斐の酒折の宮

で火たきの翁に、「にひばり筑波をすぎて幾夜か寝つる」と詠みかけられた夜の光景は、さうした旅の有様を髣髴せしめる。能褒野でなくなられたのも、野中の草の庵においてのことである。當時の旅には馬も車もない。近江で病を得られてからは、歩行も苦しくなれたけれど、他に方法はなかつたのである。

これに次ぐ記録としては、伊勢物語、業平のあづまくだりがある。業平は平安時代の前期元慶四年（西紀八八〇）に死んだ人であるから、この旅行は今から一千百年ほど前のことである。日本武尊からは八百年近くも時が経過して、このころはもう旅行に馬も用ひられた。三河の八橋で「その澤のほとりに木かげにおりゐてかれいひ食ひけり」とあるのは馬からおりて休んだのである。

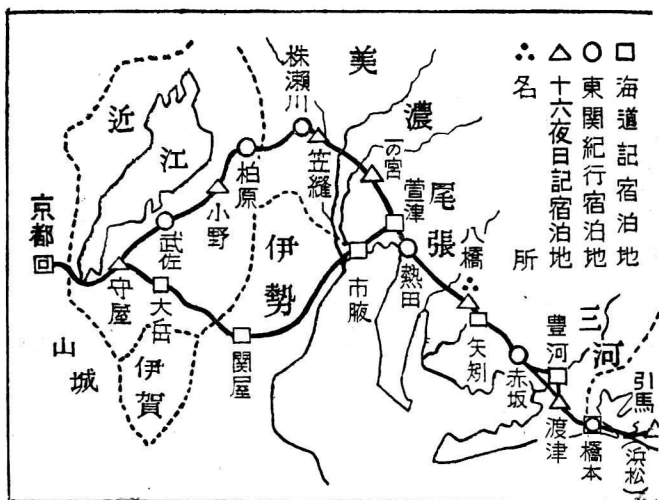
次に更級日記がある。作者菅原孝標の女が、父の任國上總から京都へ歸る道中のことを、この日記の初めに書いてゐるのであるが、それは平安時代中期寛仁四年（西紀一〇二〇）、今から九百三十年前のことである。この旅行では、女は手車に乗り、男は馬に乗つたことが知られる。

次に鎌倉時代に入つて、海道記（貞應二年・約七三〇年前）東關紀行（仁治三年・約七一〇年前）十六夜日記（建治三年・約六七〇年前）の三書が最も細かに東海道の旅を記してゐる。室町時代以後江戸時代にかけても数々の紀行があるが、今は一切を省略し、伊勢物語以下、十六夜日記までの五書によつて、古人の踏んだ東海道を偲んで見よう。



二 順路と日程

以上の旅行者がどういふ順路によつたかといふに、伊勢物語では第七段に「伊勢・尾張のあはひの海づらをゆく」とあるので、京都から伊勢路へ出て海道を下つたことがわかる。海道記も伊勢路によつた。そして都を出てから第十三日目に竹の下に泊り、そこから足柄山を越えて逆川に出て一泊し、第十五日目に鎌倉に到着した。伊勢物語には足柄・箱根の記事はないから、業平がいつれの道を通つたかは分らない。ところが、東關紀行では京都から近江路へ出て海道を下り、第十一日目に車返に泊り、翌日箱根を越えて湯本で一泊し、第十三日目に鎌



倉に到着した。十六夜日記もこれと同じ順路をとり、第十二日目に伊豆の國府三島に泊り、翌日箱根を越えて酒匂（海道記の逆川）に一泊し、第十四日目に鎌倉に到着した。

右の四書はいづれも京から東へ下つたのであるが、更級日記のは上總の國府から京へ上つたのであつて、足柄山を越えたことは海道記と同じであるが、京へ入る時には東関紀行・十六夜日記と同じで美濃・近江を通つた。

むかし東國へ通ふ道は、京都から伊勢へかかるものと、近江・美濃へかかるものと二つあり、この二つは今の名古屋のあたりで合する。また相模の國へ入るときに足柄山を越えるものと箱根山を越えるものと二

つあつた。この二つは今の酒勾のあたりで合する。もと足柄が本道であつたが、桓武天皇の延暦十九年に富士の噴火で路がふさがつたために箱根の新道が開かれ、後に足柄路も復舊して兩道が用ひられることになつたのである。十六夜日記に「足柄山は道遠しとて箱根にかかるなりけり」と書いてゐる通り、箱根越えは近道ではあるが險しく難儀な道であつた。

次に日程を調べて見ると、更級日記では上總の國府、今の市原郡惣社の邊から京都まで約百六十里、それに九十一日を要してゐる。もつとも、和名抄によると「上總國府在市原郡、行程上三十日、下十五日」とあるから、公定では、上り三十日の定めであつたが、更級日記の場合は病氣その他の事故で途中の逗留が多かつたのである。それにしても、そのころの旅行がいかに不便なものであつたかを察するに足る。鎌倉時代になると、海道宿々の設けも備はり、旅に要する日數も大體一定するやうになつた。海道記では伊勢路をとり足柄を越えて鎌倉まで約百三十里、それに十五日を要してゐる。平均一日九里弱である。東關紀行と十六夜日記は近江路をとり箱根を越えて鎌倉まで約百二十五里、東關紀行は十二日を、十六夜日記は十四日を費してゐる。これは一般旅人の日程であるが、東鑑によると、建久元年に源賴朝が初めて入洛した時には三十四日を費してゐる。これは盛な行列を作り、堂々たる覇者の威風を示した旅で、特に所所の滞在も多かつたからである。次で建久六年に第二回上洛のときには日數二十日であつた。曆仁元年正月、將軍賴經が入洛したときも二十日、賴經が職を退いて寛元四年七月歸京したときは十八日であつた。

この頼經を送つた人々が京から鎌倉に歸つたときは十二日であつた。思ふに一般旅人の旅行には十三四日を費すのが普通であつたらしい。ただし通信を職とする飛脚は七日を規定とせられ、特に火急の場合には早馬で晝夜兼行の急使を仕立てた。實朝の變を告げる使者加藤判官次郎は行程五ヶ日と定められ、承久元年正月二十八日の晩に鎌倉を出發して二月二日入京、九日歸鎌と東鑑に記されてある。また頼經が將軍職を頼嗣に譲ることを京都に申す使者平新左衛門尉盛時は行程六ヶ日と定められ、寛元二年四月二十五日の黄昏に鎌倉を出發して五月五日に歸つて來た。また北條經時の死を京都へ申す飛脚は行程三ヶ日と命ぜられ、寛元四年閏四月一日に差遣されて四日申の刻に京都に着いた。これが最も日數の少ないレコードである。

三 古人の旅情

飛脚は一種の通信機關であるから旅とはいへない。飛行機の旅はどんなものか、經驗がないから何ともいへない。汽車の旅は窓外の景色に心を慰め、乗客のとりどりに浮世の姿が味ははれるのも興あることだが、それにしても、昔の旅人が自然の懷に抱かれて、淋しい自分をじつと見つめた旅の心は、どんなに情深いものであつたらう。まづ伊勢物語について見ると、

行き行きて駿河の國にいたりぬ。うつの山にいたりて、わが入らんとする道はいと暗う細きに、蔦か

づらは茂りて、物心細く、すすろなるめを見ることが思ふに、修行者あひたり。「かかる道にはいか
でかおはする」といふに見れば見し人なりけり。京に、その人の許にとて、ふみ書きてつく。

するがなるうつの山べのうつつにも夢にも人のあはぬなりけり

遠く都を離れた淋しい山の細道で、思ひかけず見知りの修行者に行き逢つて都へたよりを托すのである。
なほゆきゆきて、武藏の國と、しもつふさの國との中に、いと大きな川あり。それを隅田川とい
ふ。その川のほとりにむれゐて思ひやれば、限りなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡し守、
「はや舟にのれ、日も暮れなん」といふに、のりて渡らんとするに、みな人、ものわびしくて、京に
思ふ人なきにしもあらず、さるをりしも、白き鳥の、はしと脚と赤き、しぎの大きな水の上に
遊びつつ、いををくふ。京には見えぬ鳥なれば皆人見知らず。渡し守に問ひければ、「これなん都
鳥」といふをききて、

名にしおはばいざこととはん都鳥わが思ふ人はありやなしやと

と、よめりければ、船こぞりて泣きにけり。

昔の旅人が大川を前にしたときの心持を、今のわれらに思ひやることが出来るであらうか。山はいかに
さかしくても、足さへあれば再び越えて歸ることも出来るであらうが、川はさうではない。渡れば故郷と
縁が絶たれてしまふのである。日も暮れがたの隅田川、ほのかに白く流れる水を前にしては、早や舟に乗

れといはれても、ためらはれるのは無理もないことである。

更級日記の旅はそれとは反對に、あこがれの都へ歸つて行くのであるが、それにもまた、所々に心ひかれて立ち去り難いことが多い。作者の乳母は出立前に夫を失ひ、しかも途中で出産をして、野中のいほりに一人残されることになった。太井川の岸、松戸の渡しに泊つた夜、作者は兄に連れられて、この乳母の假屋へ見舞に行つた。藁ぶきの小さな小屋に月の光がさしこんで、紅の衣の上に着てうちなやみ臥したる乳母を、白く清げに照してゐる。乳母は作者の髪をかきなでながら、別れを悲しんで涙を流す。いとあはれに見捨てがたく思ふけれど、明日の出立を控へてゐるので、急いで連れかへされる悲しさ、乳母の姿が目にとらついて一晚中眠ることができなかつた。

また足柄山の麓に庵を作つて泊つた晩、原始林が空を蔽うて晝さへ暗い所、折からの闇夜、雨さへ淋しく降りそそぐ。庵の前には篝火がたかれた。火勢がつのると、闇の一部が圓く大きく明るくなる。と思ふと、やがてまた暗闇が焚き火を目がけて押寄せて来る。闇と光が、かうして闘つてゐる圓光の中へ、どこからともなく、三人づれの遊女が現はれた。五十ばかりの老女と、二十ばかりのと、十四五歳の少女である。人々はこれを庵の前に坐らせ、傘の下で歌を謡はせたのであるが、きれいな少女が美しい聲で歌を謡つて、やがてまた闇の中に消えてゆく。人々は感に打たれて涙を落した。時に十三であつた作者は「幼なきここちには、ましてこの宿りを立たむことさへあかすおぼゆ」といふほどまで、心をひかれたのであつ

た。

伊勢物語の旅には一人二人の友があつたし、更級日記の旅は一家六人、他に家來たちも大勢つきそうてゐたのである。それに比べて海道記のは全く身輕な一人旅であつた。海道記の作者は世をわびて出家した人であるが、人の世のなつかしさは、捨ててますます深いのであつた。それは決して未練ではない。在俗の世には味はふことの出来なかつた深い愛に目ざめたのである。作者は、かうした心で風物を味はひながら、とぼとぼと海道を下つたのである。

東關紀行の作者は、自らを「身は朝市に在りて心は隱遁にある者」といつてゐる。どういふ境遇の人か分らないが、とにかく浮世の榮華を求めない氣樂な人であつたらしい。文章に海道記ほどの深い觀照はないが、流暢な筆で景色を美しく敘してゐる點に特色がある。これも一人旅であつたらしいが、海道記に、「獨身の遠行を企つ」とあるやうな明らかな證據がないから斷定はし兼ねる。その上、蒲原の宿を通るときに「おくれたる者まちつけんとて云々」とあるのが都からの同行者かとも思はれるので、いよいよ定めかねるのであるが、これは豊河の宿や舞澤の原の記中に見えるのと同じやうに途中の道づれであらう。

十六夜日記では、作者の第一男と思はれる阿闍梨の君が同行した。そのことは出立のところにも宇津の山のところにも出てゐる。この阿闍梨は山伏であつたといふから、阿佛尼のやうな老女にも心強い旅が出來たことであらう。この旅行は、子供のために訴訟をするといふ現實問題に追ひたてられてゐたので、「わ